

診療所・内科と医療機関ネットワーク

診療所 内科 横山 聡

私が財団法人日産厚生会診療所（当時）内科に赴任したのは、2000年4月のことでした。当時の一般内科外来の様子を振り返ってみますと、循環器系では高血圧治療薬のARB（アンジオテンシンII受容体ブロック）の登場により降圧剤の選択肢が広がり、また心房細動に起因する血栓、脳塞栓症の予防のために抗凝固剤（当時はワーファリンしか選択肢がなかったのですが）投与の有効性が広まったことです。消化器系では消化性潰瘍に対しPPI（プロトン・ポンプ阻害剤）が従来のH2ブロッカーに取って代り、かなり重症な潰瘍でも外来管理が可能となり、またウィルス性肝炎に対しインターフェロンだけでなくラミブジンなどの核酸類似体の治療選択肢が加わり、B型、およびC型ウィルス性肝炎の患者さんを高度医療機関へ積極的に紹介し始めた時代でした。



さて、当診療所は診療部・健康管理部と共に医療にたずさわっているため、全体の規模は大きく医療器械・検査態勢とも都心部のビル診療所としては恵まれた環境にありますが、当然ながら全てを自己完結的に解決はできません。他の医療機関に精査を目的として紹介し、その結果を基に次のステップへ進む場合もあります。他方、一般外来では対処しきれない疾患はすみやかに高度医療機関との連携を取る必要があります。いずれの場合も、当診療所と近いなどの交通の便だけではなく、どの医療機関のどの科が信頼できるか、また緊急に対応してくれるか、などの様々な要素を考慮の上で紹介機関を選ぶことになります。

本稿では2015年2月に当診療所が「虎の門病院医師ネットワーク」に登録されたことを機会に、これまで当診療所の内科が他の医療機関とどのような連携を取ってきたかについて、大まかにまとめました。



1. 他の診療所への紹介

当診療所より（無床）診療所への精査・治療の依頼・紹介は2009年1月より2014年12月までの5年間に273例（転勤などによる転医を除く）、年平均50例でした。目的はCT、MRIなどの画像検査、下部消化管内視鏡の依頼が多く、他には眼科へは糖尿病性網膜症についての相談などがあります。

2. 病院への紹介

病院への紹介は2005年1月より2014年12月までの10年間に442例、年平均44例でした。

グラフ1に医療機関別の内訳を示します。やはり近隣港区内の医療機関が多くなっています。（公財）心臓血管研究所付属病院は循環器疾患に特化した病院であり、虎の門病院、東京慈恵会医科大学付属病院は、総合病院として内科系のみならず、外科系も含めてお世話になっています。特に虎の門病院は2011年に救急部が新設され、緊急と思われる患者さんの24時間受入体制が整いました。（公財）朝日生命成人病研究所付属病院（2011年に有床の医院に改変）は、糖尿病の治療で実績があり、総合病院にはない細やかな対応をして下さいます。

グラフ2に病院紹介の疾患別内訳を示します。

疾患別で最も多いのは循環器系です。その中で最も多いのは虚血性心疾患で、自覚症状や心電図検査などからこれを疑い、より高度な検査を依頼するものです。ここには急性冠動脈症候群（不安定狭心症、急性心筋梗塞）を3例含みます。次に多いのは心房細動の治療方針についての相談で、特に壮年期の高血圧、糖尿病などの他のリスクがある患者さんの発作性心房細動をど

うするのかは難しいところです。なお、例数は少ないものの看過できないのは、肥大型心筋症に伴う不整脈、心不全です。ほとんどが無症状の壮年期までの心筋症に対してどのような介入が可能かは、今後議論されるべき課題と考えます。

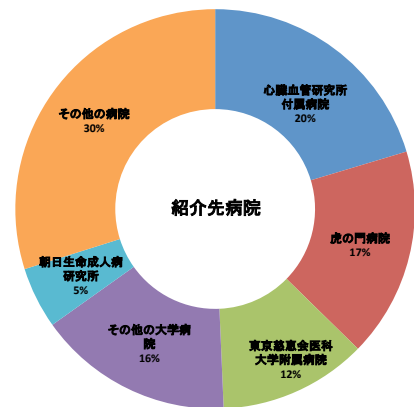
消化器系の多くは、当診療所の上部消化管造影／内視鏡検査で消化管の悪性腫瘍を疑った例と、ウィルス性肝炎、および多くは大量飲酒習慣による高度な肝障害などの肝疾患例があり、さらに急性腹症9例を含みます。

内分泌・代謝関連では糖尿病が多く、教育入院、一時的インシュリン導入を含めた濃厚な治療をお願いしています。しかし残念ながらその後の外来診療で良好な経過を維持するのはなかなか困難な状況です。甲状腺疾患を疑う場合、当診療所での甲状腺エコー検査で何らかの所見があった場合には、念のため精査を依頼しています。



以上、様々な医療機関とのネットワークに支えられている当診療所の立ち位置の一端をご紹介いたしました。今後も他医療機関との密接な連携の上で、一層の一般外来水準の向上に努めたいと考えます。

グラフ1
紹介先病院分類



グラフ2
紹介事由の疾患の分類

